変化の予感

校長　山田浩之

二か月ほど前、年の瀬が押し迫っていたこともあり、それほど大きなニュースにはならなかったのですが、学校関係者にとっては、「おっ、出たな」と思うことがありました。文部科学大臣が中央教育審議会に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」を諮問したのです。

日本の学校は、「学習指導要領」という基準に従って勉強を教えています。教員や学校関係者でなければ、「聞いたことはあるけど、見たことはない」という人がほとんどではないでしょうか。大体十年に一度くらいの頻度で改訂されています。その学習指導要領の改訂について検討してほしいという諮問です。これが出たということは、この後、次の学習指導要領に向けた議論が活発に進んでいくということになります。

諮問は、もちろん、審議会に話し合ってほしいテーマを述べているのですが、よく読むと、文部科学省が現在の学校教育についてどのようなことを課題と捉え、その解決のためにどのような方向に進もうとしているのか垣間見ることができます。

紙幅の都合もあるので、個人的に気になったところを拾ってみます。

【課題を述べているところで】

多様性を包摂し、一人一人の意欲を高め、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題です。

【審議テーマを述べているところで】

興味・関心や能力・特性に応じて子供が学びを自己調整し、教材や方法を選択できる指導計画や学習環境のデザインの重要性、デジタル学習基盤を前提とした新たな時代にふさわしい学びや教師の指導性についてどのように考えるか。

誤解を恐れずに大きくまとめて言うと、子どもが、自分に合った学びを自ら選んで進めていく学習を取り入れていく、ということのようです。

日本の学校は、これまでも様々な変化に対応してきましたが、このような授業観の変化は、結構大きな変化になるのではないかと、個人的には思っています。日本の学校は、皆で同じ学習をすることが基本でした。対して、一人一人の子どもが、自らの学びを選び、進めていくというのは、新鮮です。

新潟小学校では、今年度、この一人一人の子どもが自分の学びを選択し、調整する授業を試行してきました。もちろん、まだ手探りの状況です。子どもの実態から、どのような授業のスタイルが効果を発揮するのか、今後も探っていきたいと思います。

自分がやってきたことが大きく変わることには、不安があります。それでも、常に新たな教育を切り拓くことは、大切だと考えています。